

授業報告——「原爆文学」から読む「戦後」——

深津 謙一郎

学会でお世話になつてゐるYさんが今年度サバティヤカルを取られるとのことで、この四月から一年間、都内の四年制総合大学で日本文学の授業を一コマ担当することになった。これは文学部二、四年の学部学生を対象にした通年の講義科目で、Yさんに問い合させたところ、テーマは深津にお任せであるとのこと。代役の身として言えば、まるきりお任せというよりもむしろ「漱石を頼む」とか、「昭和初年代の文学で」などと指定してもらつたほうがじつは楽なのだけれど、細かい注文をしたところで深津には「どうせ無理」と判断されたのかもしれない。

それでいろいろ考えた挙句、これまで二の足を踏んできた「原爆文学」の看板を授業テーマに掲げてみることにした。二の足を踏む理由はいくつかあったが、その最たるものは、このテーマの「初心者」に近い私に、通年を持ちこたえるだけの授業内容を果たして準備できるのか、という不安であった。授業というものは、教員が一方通行的に教え込むものではなく、学生から学ぶ点が多々あることはもちろん分かつてゐるし、じつさいそう（でしかない）なのだけれども、しかし本務校で、長いこと付き合う学生たちのまえではあまりボロを出したくないという見栄もある。そこ

へいくと今回の場合、学生たちとのお付き合いはまさに一年間限定。「旅の恥はかき捨て」ではないけれども、思い切つてこのテーマにチャレンジしてみることにした。

前年一二月時点でシラバスに記した授業概要は以下の通り。

——「原爆文学」から読む「戦後」——

この授業では、原爆ないし核戦争をモチーフにした作品群を、それが発表された時系列順に分析・考察しつつ、その結果を各時代の社会状況・文化状況に接続させることで、「戦後」における(1)ナショナリズムと文学の問題、および(2)大衆文化と文学の問題の二点について理解を深め、新たな知見を得ることを目的とする。具体的には、一九四五年—一九五四年では、原民喜『夏の花』や本多猪四郎『ゴジラ』など。一九五五年—一九六四年では、黒澤明『生きものの記録』や大江健三郎『ヒロシマ・ノート』など。一九六五年—一九七四年では、井伏鱒二『黒い雨』など。一九七五年以降では、林京子『祭りの場・ギヤマン ビードロ』やこうの史代『夕風の街 桜の国』などを取り上げる予定である。

ところで、新学期が近づくとつれ、このあまりに「マニアックな」テーマで、いったいどれほどの学生を集められるのだろうか（もし僅少科目になったら、Yさんにも申し訳ない…）という不安が頭をもたげようになる。しかし蓋を開けてみればさすがにそこは規模の大きな総合大学。一回目の教室には四〇名弱の学生が集まつていて、正直胸をなでおろした。この時点では正式な履修登録はまだだったが、彼らに受講動機を問うたところ、最も多かったのは、「中学・高校時代の平和学習でこのテーマに興味を持つ

たから（逆に、違和感を持ったから）というもの。それ以外では、東日本大震災と原発事故を受講動機に挙げる学生も少なからずいて、これは「三・一一」以降、「原爆文学」が従来とは違った文脈で関心を持たれつつあることの証左なのだろう。

また彼らには、「原子爆弾が世界で最初にさく裂した日時、場所はいつ・どこか」という問いも投げかけてみた。これは昨年末、原文研シンポジウムの席上で松永京子さんから伺ったお話をそのまま使わせて頂いたもので、解答は全員が「一九四五年八月六日、広島市」。これから「原爆文学」の授業に出ようという学生はさすがに「八・六」を知っていたけれども、しかし、「一九四五年七月一六日、ニューメキシコ州」と答えられた学生は一人もいなかったわけで、「八・六」は記憶しても「七・一六」は記憶しない（原爆をめぐる）我々の想像力の偏りをはつきりと思い知らされた。

たとえば、「日本は唯一の被爆国」で、だからこそ我々は全世界に向けて核兵器の廃絶を訴えるのだという立場表明が、（そのよき意図とはべつに）ある種のナショナリズムと結びつき、またそのことが敗戦の傷を癒し、復興を果たす「戦後」日本の同一性形成に寄与した側面も否めない。前期の授業では、「夏の花」の全集配列変更問題や、『原爆の子』（ちょうどこの映画を授業で見ていた日、新藤兼人の訃報に接した）『ゴジラ』の物語分析をつうじて、五〇年代半ば以降、原爆の他者性が徐々に手懐けられ、原爆表象が「戦後」日本の肯定的な同一性形成に流用されていくこと——しかし他方で、そこから排除・抑圧されていくものへの後ろ

めたさや、それが回帰することへの恐怖も作中描かれていることなどについて考察した。

授業では、毎回リアクションペーパーを提出させ、学生の意見から多くの示唆を得たことは言うまでもない。私は「仕切り屋」的傾向が強く（というより、たんに心性的な性分からのかもしれないが）、年間であれ、毎時間であれ、授業プランは比較的固めて授業に臨むほうなのだが、今回はじぶんの勉強不足と非常勤の気安さも手伝って、学生たちのリアクションペーパーを利用しながら、「風任せ」の授業を楽しめた。その結果、予定していたテキストに触れられず、逆に予定しない『モスラ』を取り上げるなど、泥縄的に勉強しなければならぬことが一層増える結果となった。しかし『ゴジラ』・『モスラ』とも、名前は知っていても実際の映画を見ていない学生は意外に多く、また、製作年はわずかな七年差ながら、戦争の記憶の表象のされ方においてまったく異なる両者の比較検討には、多くの学生が興味を持ったようだった。

後期の授業では、前期から食い込んだ『モスラ』を終わらせたあと、林京子とこの史代を読んでいる。五〇年代とはまた違う今日のナショナリズム、とくに「三・一一」以降の今日的な文脈のなかで、我々の今を無自覚・無条件に肯定したり、我々の今をとりまく戦争から目を背けたりするために原爆表象を利用するのではなく、むしろ現代の不安と困難を直視するためにそこから何が学べるのか。また、戦争体験のない我々は、原爆の記憶をどのように分有していけるのか。授業も残り僅かだが、学生たちと考えていこうと思う。